

1986年8月25日発行 43号

中村 哲・尚子

Dr. Tetsu NAKAMURA

% Mission Hospital Peshawar

Peshawar, N. W. F. P

PAKISTAN



7月7日の総選挙の報を、私は研修中の韓国南部の麗水で聞いた。保守勢力の圧勝で日本国民は一つの意志表示をしたのである。複雑な感慨をもった。

つい20年前まで、「人民」や「平等」ということばがいかに我々を魅了していたことだろう。理想は美しくなければならなかった。妥協を重ねて現実に対応してゆくことは必要であっても、現実を無批判に是とする態度は耐えがたいものに映っていた。あの時、北京放送から流されるいせいのよい誇大宣伝、ベトナムの独立戦争は、この理想を力づけていた。人民の平等に加え反西欧といういくぶん大時代的な復讐心がわたしたちの理想の底流にはあった。

時代は知らぬ間に人の心をかえてゆく。故郷でおこった三池鉦の争議、その後の産炭地の荒廃、ガス爆発と大量のCO中毒患者の発生、水俣、佐世保。いつも火中に粟を拾わざるを得ず、その後始末にも関らざるを得なかった私は、もはや「地上の楽園」を信じなくなった。(そして、目立った事態がある時のみ現われては消えてゆく活動家、政治組織、ジャーナリズムに払いがたい不信をいだいた。)

そして——いいことか悪いことか、日本は世界で屈指の豊かな、且つ平等な国にいつのまにかなっていった。こうして国内に関する限りはおそらく人々を満足させる情況が造りあげられていったのであろう。

私自身は本質的に保守的な日本人であるが、この現在の情況が成るまでには余りに多くの犠牲があったのだと、古びたが美しい理想を記憶の中からひきだして叫びたい。そして今なお犠牲は続いているのだと。

とはいえ、我々は余りに楽天的すぎた。人間の相互扶助についての過度の期待はうらぎられ続けた。これからもそうであろう。地上の楽園は、我々に虚無感を拓けるのみで心は決して豊かにはならぬ。かえって、伝統社会と自然の壊滅的な破壊は、ゆきどころのない空しい心情を与える。

私の祈りのことばは時に沈黙である。

韓国の田舎の人情は美しい。かつて我々の中にあったものが残っており、何かしら郷愁をよびおこすのである。しかし、ものの豊かさを代価に失ったものを回顧するのは痛ましいことだ。